

- ① 1 由来 2 脳裏 3 修復 4 風潮 5 事態
6 領域 7 絶好 8 功績 9 外す 10 独創
- ② 問一 1 心 2 気 3 火 4 水
問二 1 生半可 2 打算的 3 不条理 4 自発的 問三 1 ウ 2 エ 3 イ
問四 1 アメリカ人 相手を説得 日本人 お互いの気 2 a 自己主張 b 共感性
- ③ 問一 ウ 問二 ア 問三 エ 問四 イ 問五 エ
問六 a 心配 b 我慢(くんで) 問七 以前のわた 問八 まだ 問九 イ
問十 ちゃんとした母親、いい母親などは大人が作った基準にすぎず、それより大切なのは子どもが母親から愛されていると実感できることであり、それこそ子どもの幸せなのだ〔ということ。〕
- ④ 問一 a イ b エ 問二 言葉で名前 問三 ウ 問四 エ
問五 1 エ 2 ウ 3 ア 問六 ア
問七 a 差異を明確に区別する b 単純に同じ意味
問八 a 精度や解釈の深さ b 独自の文化や価値観 c 風土に応じた意味
問九 「山紫水明」という言葉は、個人体験が普遍的な言葉になることの好例であり、言葉と言葉の微妙な差異を理解して、使いこなす力の極まったものである。

解説

- ③ 出典は、いとうみく「蒼天のほし」〈双葉社〉。
同じ作者の作品に「天使のにもつ」「朔と新」「あしたの幸福」などがあり、どれも入試によく出題されました。「天使のにもつ」は中学生の斗羽風汰が保育園で職場体験する話でしたが、本文では大人になった彼が保育士として園で働いています。
シングルマザーとして仕事と育児で疲れ果てる母親、お母さんが大好きなめぐみ、そんな二人をやさしく時に厳しく見守る園長と、保育士坂寄と風汰。それぞれの心情を、会話と表情、しぐさを通じて読み取っていきましょう。場面は、深夜の保育園の一室に固定され、時間が途切れることも、人物が入退場することはありません。
- 問一 小説における風景描写には必ず「意味」があり、それはほとんどの場合主人公の「内面」や「心情」を表します。この場面では、直前の園長の言葉にあるように「事故にあったんじゃないか」「事件に巻き込まれたんじゃないか」と「心配」したり「不安」になったりした保育士たちの気持ちや、疲れ果て「うつろな目」で足元を見る母親の不安な内面を表します。(イ)と(エ)がすぐに消え、(ア)は「過ぎ去った」が×です。
- 問二 ——線②では、「手をふりほどいて」と、聞き耳を持たないでもいった反抗的な態度だった母親が、なぜ④では「ソファーに腰を落として」卒園してから1年数か月の生活状況を語り始めたのでしょうか？ ②から④までの間に、母親の気持ちをなだめるような、どういっさきっかけがあったのでしょうか？ 保育士は卒園したら園児から解放され、「なんの責任もなくなる。でも、親はちがう」という母親の言葉に、「その通りだなんて思って」と園長は理解を示します。さらに、園長は、育児は親だけであるものではないのに「現実には、圧倒的に親にのしかかっている」とつづけます。そんな園長の言葉を聞いた母親は、この人の前でならこの数か月間の頑張りと、つらさと、疲れ果てた末の育児放棄をわかってもらえるのではないかと、自然に語り始めてしまったのでしょうか。誤答(エ)には(60～66行め)の内容がありませんし、「権利」が合いません。
- 問三 「おれは、保育士です」と言う風汰の言葉に、母親はなぜ「笑った」のか？ 彼女にとって保育士とは、ただの「仕事」であり、「卒園したら子どもから解放されて」「なんの責任もなくなる」(50～52行め)存在でしかない。「でも、親はちがう」のだ。24時間、毎日、親は子どもに責任を持たなければならないのだ。そんな責任も負担も負わない保育士ふせいが何言ってんだ！……という感じだったのでしょう。「親」「責任」というキーワードを含むものを選びます。誤答(ウ)は「たとえわがままな子がいても」が関係ありません。
- 問四 ——線⑤の母親の表情は、二つに分けられます。まず、「小さく笑って」は何に対してか？ 直前の5行分を読みます。めぐみを一人で留守番させている間に、泥のついた足で歩いた跡が部屋中にあたり、蛇口から水が出っぱなしだったりといった小さなかわいい失敗を思い出して、思わず微笑んだのです。次に、「視線を泳がせた」のはなぜでしょうか？ 直後につづく長い会話(87～97行め)をよく読みます。……卒園した当初は、一人で留守番させているめぐみが心配で、なるべく早く帰宅した、けれども次第にまだ大丈夫だろうと帰宅が遅くなり、そしたら、職場の告げ口で総務に異動になり……仕事を人一倍がんばったが、めぐみにもずいぶん我慢させて……と、この数か月間の苦勞と、めぐみへの申し訳なさが思い返されたのです。
- 問五 「総務へ異動に」なったのは、「めぐみのせい」だと思ってしまう、という内容を選びます。誤答(ウ)は「昇進」が、また(ア)は「疎んじられて」(＝嫌われて、遠ざけられる)が合いません。「家庭に負担がかからないように」(94行め)とあるように、職場では(ありがた迷惑な)配慮・親切から異動させられたのです。

問六 「それ」は、直前の二文を指しています。めぐみが夜遅くまで「一人でちゃんと」留守番していたこと、「さみしい」などとこぼさなかったこと。めぐみは、なぜそうできたのか？ 風汰の会話（141～143行め）と同じ気持ちですが、設問文にあるように——線⑤から⑦までの範囲で二字熟語を探します。なお、aには「負担」も入りそうですが、「心配をかけたくない」の意で、「負担をさせまい」とは言いません。

問七 「いい母親」でなくなったのは「小さな出版社」に転職（101行め）してからであり、「仕事のあと飲みにも付き合い」ようになってからです。そして「自分のしたいことをして生きるって、解放された気分」（108・109行め）を味わっていた自分はもう「いい母親」ではなくなっていたと振り返っているのです。その直後を書き抜きます。

問八（136行め）の方だけでも書けるはず。直前の「もう」対になる「まだ」です。

問九 「親から愛されているって実感できる子どもは幸せだ」（187・188行め）と考える園長が、母親から一番聞いたかった言葉は、めぐみをいつくしむ母親の言葉でしょう。「どうして迎えに来た」のかという問いかけに、母親は「……会いたくて、めぐみに」と答えます。心の奥から自然にできた真情あふれる言葉を聞いて、園長は、ああ、まだ大丈夫だ、わが子を愛している限り、なんとかかなと思ったのです。そして、自分も保育園長としてできるだけ協力しよう、卒園しためぐみも特別に預かろうと言いだすのです。誤答の（ア）は「子育ての心構えを説きたい」が、（ウ）は「仕事と子育てのどちらが大切か」が、（エ）は「母親としての資質」が、それぞれ合いません。

問十 ——線⑩以下の園長の会話に注目します。含めるべきポイントは二点です。①「ちゃんとした母親」「いい母親」になどならなくていい。（178・179行め）または（182・183行め）を利用します。②母親から愛されていると実感できる（大好きだと・大事に思われていると感じられる）子どもは幸せだと思う（185～188行め）……この二点をつなぎ合わせます。

④ 出典は、齋藤孝「最強の言語化力」〈祥伝社〉。

まず、本文全体を通読し、いくつかの意味段落に分けましょう。

1（はじめ～38行め）ソシュールの言語学の紹介……「言葉によって世界ができています」

2（39～94行め）言語化力の大切さ。言葉を学ぶ際には、その背景にある文化まで含めて理解したい。たとえば、「木」と「wood」は単純に同じ意味なのではなく、その差異を明確に区別するべきだ。

3（95行め～おわり）コミュニティごとに言葉の精度や解釈の深さは違い、それぞれ独自の文化や価値観を反映する。……意味段落2と3では、具体例が多いので、その範囲と、それらをまとめた部分とをしっかりと区別しましょう。各問の根拠・ヒントは、もちろん後者の部分にあります。

問二 ——線①の言葉は（30・31行め）にあります。「つまり」の直前の35～40字を書き抜きます。

問三 ソシュール（1857～1913）はスイスの言語学者、記号学者、哲学者です。20世紀の言語学に決定的な影響を与えた「近代言語学の父」であり、その思想は複雑かつ広大です。本文ではあくまでも筆者なりにごく単純に要約したものです。上記した意味段落1の範囲でも、とくに（22～38行め）をよく読みましょう。すでに存在していた動植物やモノに、人間が名前を付けたことで、それらは区別され、存在が浮かび上がり、意味が生まれた。そして、言葉とは、他の言葉との「差異」によって規定され、それが意味の差異を生み出している、ということです。（ウ）はソシュールが学説を唱える以前に、人々が理解していた内容（9～16行め）です。

問四 直後の（42～46行め）をよく読みます。「語彙力が低く言葉を正しく構成できない人」は、「精緻で厚みのある会話や文章表現ができ」ないのです。誤答の（ア）は「出世」が、（イ）は「主張」が、（ウ）は「相手に通じない」が、この範囲の内容と合いません。

問六 意味段落2を、とくに（62～68行め）および（76～80行め）をよく読みます。「良い」「good」「bon」は完全なイコールではなく、比較的近い意味を持つ言葉として便宜的にくっつけて整理してあるだけだ。つまり、この3語は「いい」という「意味の範疇が重なる部分」（76・77行め）があるために、とりあえず「同じ意味の単語」として分類・整理しているだけなのです。そういう意味で誤答（イ）の「全く同じ意味」や、（エ）の「意味の範囲・領域がぴったりと重なる」が×です。（ウ）は後半の「～べきではない」などという主張を、筆者はしていません。

問七（89～94行め）をよく読みます。「old」と「古い」はイコールではなく、「意味の範疇が重なる部分とそうでない部分がある」（76・77行め）のです。それなのに、この「日本語を覚えたての英語圏の方」は、「意味の範疇が重ならない部分」に注目して、食べ物を「年寄り」と言ってしまったのです。つまり、「単純に同じ意味として括」ってしまい、「差異を明確に区別」しなかったのです（92・93行め）

問八 意味段落3には、韓国の「辛い」、フィンランドの「雪」、日本の「ブリ」、頼山陽の「山紫水明」という4つの例が出てきます。それ以外の「まとめ」の段落（95～99行め）および（124～128行め）の中から、あてはまるキーワードを探しましょう。

問九 頼山陽を「ほめたたえて」いる内容は（120～123行め）の一段落しかありません。含めるべき内容は「個人の体験が普遍的な言葉になること」、「これぞ言語化力の極み」だ、ということです。が、設問文に『『言語化力』という言葉は使わず、わかりやすく言い換えなさい』とあるので、「それが言語化力のベースです」（40行め）に注目し、「それ」が指す部分を利用します。